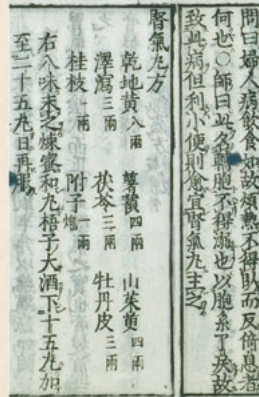




杏雨書屋(きょううしょおく)は大阪市にある公益財団法人武田科学振興財団が運営する図書資料館。国宝や重要文化財のほか、国内でもトップクラスの古医書を収蔵しています。このコーナーでは先人が古医書に残した現代に通じるメッセージを、小曾戸先生に紐解いていただきます。

其ノ四 金匱要略 一八味地黄丸

案内人◇小曾戸 洋
(北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部 部長)



杏雨書屋蔵
『金匱要略』(日本・1668年)
に見える腎気丸の処方

杏雨書屋蔵
『経史証類大観本草』(中国・1214年)
に見える地黄の図



『金匱要略』は『傷寒論』と同じく後漢(3世紀初)の張仲景の著とされ、両書と合わせて『傷寒雜病論』と呼ばれることもあります。『傷寒論』が急性熱性病の治療薬であるのに対し、『金匱要略』ではその他の雜病すなわち循環器、呼吸器、泌尿器、消化器の障害、皮膚科、婦人科、精神科の疾患、また救急治療や食品の選別にいたるまで、広い範囲の医療に及んでいます。

もともと『張仲景雜方』と称されていましたが、その後失われてしまい、宋の時代に再発見されて大幅な編集が加えられ、1066年に『金匱要略』と題されて初めて印刷出版されました。

日本では江戸時代に多くのテキストが出版され、『傷寒論』とともに古方の聖典として尊ばれました。婦人科によく用いられる当帰芍薬散や桂枝茯苓丸、中高年の倦怠感や頻尿などに用いられる八味地黄丸は『金匱要略』を典とする名処方です。なかでも八味地黄丸は『金匱要略』のなかでもっとも頻繁に使われている漢方処方といえるでしょう。

八味地黄丸は『金匱要略』では「八味腎気丸」「腎気丸」「崔氏八味丸」の名称で5回ほど出てきます。「八味」とは、その処方が地黄・山茱萸・薯蕷(山薬)・沢瀉・茯苓・牡丹皮・桂枝・附子の8つの薬味で構成されることによります。

「腎気」とは腎の臓の正気のことです。中国伝統医学

では人体の内臓を五臓六腑に分けます。腎は五臓の1つで、五行説(木・火・土・金・水)では水に配当され、生理機能としては「精」を蔵します。この「精」とは主として生殖能力をいいます。腎は泌尿器でもあるので、古来、泌尿器疾患にも用いられますが、「腎気丸」の意味するところは腎の蔵する精を補うことにあります。このことから老化予防薬としても用いられ、江戸時代には精力増強剤の代名詞として、しばしば川柳にも詠まれました。

八味腎気丸の精力増強(補腎)作用の主役はなんといっても地黄でしょう。地黄の色は黒く、五行説では水=腎に該当します。後世、八味腎気丸が八味地黄丸と称されるようになったのはそのためにほかなりません。

ロックミンゴールドは、この八味地黄丸に補気・補益の代表薬である薬用人参を加えたもの。さらに強力になった「八味地黄丸」といってよいでしょう。

八味地黄丸は元気を高める漢方。
イキイキ過ごしましょう!



小曾戸 洋(こそと ひろし)

日本医史学会理事長、杏雨書屋副館長、上海中医薬大学客員教授。1950年山口県下関で小曾戸薬局を営む小曾戸丈夫氏の長男として生まれる。宋の時代に散逸した貴重書『小品方』の発見や馬王堆(まおうたい)という中国湖南省にある紀元前2世紀の遺跡で発見された医書の解読により、中国でも医史学研究で著名な成果をあげる。主な著書『日本漢方典籍辞典』(大修館書店)、『中国医学古典と日本』(塙書房)、『漢方の歴史』(大修館書店あじあボックス)。